
白い道

川崎ゆきお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い道

【Nコード】

N0374M

【作者名】

川崎ゆきお

【あらすじ】

人は何かのモードに入ってしまうことがある。

人は何かのモードに入ってしまったことがある。

高山が、そのモードの一つに入ったのか、山歩きを思いついた。街に疲れ人に疲れたのかもしれない。

ここでモードを変えないと壊れてしまい、仕事や家庭にも影響が出ると考えてのことだ。

高山は子供のころののんびりとした暮らしを思い出した。あのころが一番安定していたように思えた。

子供のころはそうは思っていなかったかもしれないが、今よりは遙かにました。

家族でハイキングしたことを思い出し、あのコースを辿ろうと決めた。

決め事だらけの暮らし中で、どうでもいいことを決めるのは快かった。

高山は誰にも言わず、ふだん着のまま山へ入った。

そのコースは二時間ほどだ。ケーブルで頂上まで登り、そこを下れば駅に出る。下りばかりの楽なコースだった。

平日なので、山頂駅は静かだった。気楽に登れるほど低い山ではないためだろう。

青葉台駅へ出るコースはすぐに見つかった。二十年以上前とそれほど景色は変わっていないためか、記憶も蘇りやすかった。

高山は下り坂を淡々と下ってゆく。

小鳥のさえずり、樹木の匂い。足の裏に伝わる土の感触。これが忘れていたモードであり、欠乏していた感触なのだ。

高山はある記憶が蘇った。すっかり忘れていた白い道の記憶だ。

山道は谷底を縫うように続いており、視界は悪かった。それが急に見晴らしのよい場所に出た。遠くの山々と白く続く細長い道があった。このコースとは違う道だったのか、このまま下ってゆけば、

あの白い道を通るのか、よく分からないまま見ていた。

結局その道へは出なかった。地図で調べても、そんな山道はなかった。

と、というような記憶だ。

高山は面白いことを思い出したと思い、見晴らしのよい、その場所まで急いだ。

そして展望が開け、その白い道を見つけた。股旅物のドラマの口ケで使えそうな山道だった。

高山は足元を見た。なんとか降りて行けそうだった。

いつも決まったコースしか歩いてこなかった高山は、怒りのような感情を発奮させ、崖を下った。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0374m/>

白い道

2011年10月2日23時17分発行